訪問看護婦物語

老人病棟

江川晴

小学館

老人病棟

問看護婦物語

江川 晴

小学館

老人病棟 訪問看護婦物語

発　行　1991年12月10日　第1版第1刷発行　　——検印廃止——

著　者　江川　晴
発行者　相　賀　徹　夫
発行所　株式会社　小　学　館
〒101-01　東京都千代田区一ツ橋2-3-1
編集　東京（03）3230-5122
電話　業務　東京（03）3230-5333
販売　東京（03）3230-5739
振替　東京8-200番
印刷所　共同印刷株式会社

© Haru Egawa 1991

Printed in Japan
ISBN4-09-387082-9

・造本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、業務部までお送り下さい。送料小社負担にておとりかえいたします。
・本書の一部または全部を無断で複写（コピー）複製・転載することは法律で定められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害になりますので、あらかじめ小社あて許諾を求めてください。

訪問看護婦物語

老人病棟

裝丁　木村多恵子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

第一章　病院勤務から訪問看護婦へ　5
第二章　さまざまな老い　85
第三章　死者の尊厳　165
終　章　鮎子の決意　243
あとがき　250

第一章　病院勤務から訪問看護婦へ

1

夏の終わりにしてはいつになく蒸し暑い夜だ。電話のベルで目覚めたのは午前二時だった。

鮎子は反射的に電話機の上にかぶせてあるざぶとんをはねのけ、眠りこけている夫を気づかいながら受話器を取る。

寝しなに、電話機をざぶとんでくるむようにして枕元に置くようになったのは、鮎子が訪問看護婦の仕事につくようになってからの習慣だった。

例によって訪問先の患者になにか異変でも起きたのだろうか。鮎子は声をひそめて、

「こちらは津川でございます」

と、居ずまいを正した。

「モシモシ、鮎子さん、こんな夜中にすみません」

意外にも実家の兄嫁、寿々子(すずこ)の声である。

とたんに鮎子は寝込んで三年めになる母の顔が目の前に浮かび、心臓がドキンとなる。

「実は、お姑(かあ)さんが……」やっぱりそうだったのか。

「お母さんが、どうかしました?」

「それが、おかしなうわごとを言ってまぶたをヒクヒク痙攣(けいれん)させているの」

「おかあさんって、大きな声で呼んでみて……」

「ええ、呼びましたよ。そしたら、はい、って返事しました。でも主人が脈が乱れているって言うんです。救急車を呼んだほうがいいかしら……。それとも大丈夫かしら」

鮎子は壁の時計を見上げながら「意識はたしかである」と思っただけで胸をなでおろした。

「それで、お熱は？　平熱。吐気もなし。じゃ母の脈の打ちかたを声で言ってみてくれますか。親指の下のほうを探ってみれば脈がふれるでしょ。わからなかったら兄さんに代わってください」

以前、兄の公雄には脈はくの測定法をしつこく教えたことがある。寿々子にも教えておいたつもりだが、電話の向こうの彼女はオロオロしていて冷静を欠いている。この際は兄のほうが適確に伝えてくれるだろうと鮎子は計算したのである。

寿々子に代わって公雄が電話にでると、言われたように母の脈の打つとおり「トン、トン、トトーン」と声を出して伝えるのだった。

一分間に八四、少し多いが救急車でつれて行くほどの乱れではなさそうだ。

「唇や爪の色が黒ずんでもいないし、呼吸も苦しそうではないのね。それなら救急車を呼ぶことはないと思うわ。明朝一番に笹井先生のところに電話で報告して、なるべく早く往診をしていただいたらどうかしら。私もなるべく早くそちらへ行きますけど、また、なにかあったら電話をください」

鮎子は電話を切るなり、ふーっとため息をついた。

「船橋のお姑さん、よほどぐあいが悪いのか」

いつの間にか省一も起きていて、話の様子を聞いていたらしい。
「行ってみなければわからないけれど、うわごとを言ったらしいのよ。まぶたがヒクヒクしているって。まさか痙攣の前ぶれじゃないでしょうね。いまからタクシー呼んでもねえ」
「そんなに悪いのか」
「でも、本人はちゃんと返事をしているから……」
「明日の朝、一番で行くんだな」
「そうするわ。でも、明日は私を待っている家が三軒もあるのよ。やっぱり、あのとき、思い切って仕事を辞めるべきだったんだ」
「いまごろ、ぐずぐず言ってもはじまらないだろ。自分たちでなんとかやると言ってくれた兄さん夫婦の意志も尊重すべきだし」
「それはわかってるわよ。わたしの母ですもの。ほんとうは、すぐにでもとんで行きたい気持ちよ。でも、こう毎度夜中に起こされるんじゃ、受け持ちの患者さんに迷惑がいくのよ」
「おまえ看護婦なんだろ。夜中に起きるのは当り前じゃないか。お義姉さんは素人だぞ」
なにかと言えば、おまえは看護婦なのだから病人を看るのは当然だと身内の者はいう。自分が省一の母、つまり姑の菊枝を看護し続けた三年の間も、そのような目でみられていたのかと思うと、鮎子は夫の言葉にカチンとくる。が、いまは、そんなことに、いちいち腹を立てている場合ではない。
この先、自分が東京M区の老人福祉課に所属する訪問看護婦として責任を果たしながら、実家

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の母を看護する兄嫁の手助けを充分にできるかどうかが問題であり、目下の悩みの種なのである。老いた親が終の病いに倒れたとき、仕事を取るか、老親を看るか……。

仕事をもつ女性が結婚して妊娠・出産・育児の難関をどうにか切り抜けたころにぶつかる壁が実はこれなのである。

有名な女性評論家は両親の介護問題は女性問題だと言い切っているが、自分は看護婦であるだけにことはより複雑である。

その点、姑の発病は職場の病院を退職した直後のことだったから、鮎子にとっても津川一家にとっても幸運だったというべきかもしれない。

千葉県船橋市に長男夫婦と暮らしている鮎子の母喜和子が、三年前、脳血栓で倒れたのも今日のようにむし暑い夜だった。母が倒れたとき、

「鮎子さんは大事な仕事があるのですから、それを続けてください。そしてなにかわからないときは、よろしく頼むわ」

と寿々子は殊勝に言ってくれたのだが、彼女の介護ぶりは、プロの目をもつ鮎子には不満な点が多々あった。それを指摘すると、

「これでいい。このほうが楽だよ」

患者である母のほうが嫁に気をつかって、鮎子の言葉に従わない。それで予想された蓐瘡（床ずれ）ができると鮎子が呼ばれ、だから言わないことじゃない、と鮎子は内心思いつつ手当てをする破目になるのである。

「まぶたの痙攣は、脳に新しい血栓を起こしつつある前徴かもしれない。どうか母の顔を見るまでは、悪い知らせがありませんように……」

この時ばかりは鮎子も神に祈らずにはいられなかった。

それからはほとんど眠れず朝の五時前から自分たち親子四人の朝食の支度にとりかかった。中学一年生の長女真由美と夫の弁当をつくり（小学五年生の長男圭太は、学校給食があるので弁当はつくらずにすむ）、夫には、なにかあれば会社に連絡するし、何事もなければ予定通りの仕事をすませて帰宅します、と了解をとり、いつものように訪問看護用の黒革のバッグを肩からかけて、私鉄の一番電車に乗り込んだ。

母の状態を自分の目で確かめてから、その日訪問する予定の患者宅に、電話で打ち合わせをしようと鮎子は考えていた。

東京のC区にある鮎子の家から実家に行くには、私鉄とJR線を乗り継いで約二時間はかかる。それでも車で行くよりは電車のほうが速い。鮎子が実家に着いたのは、午前八時少し前である。

2

娘の顔を見るなり、ベッドに寝ている喜和子は、「ああ」と低い声で言った。

母の色白で小さな顔の表情と目の動きを見て鮎子は、

「これなら大丈夫だ」

と思った。喜和子は、怪訝そうに鮎子を目で追いながら、
「いまごろ、どうしたの」
と言う。
「うん、ちょっと、お義姉さんに用事があって……」
鮎子はとっさに嘘を言う。
母は、いつもより、むしろ頭のひらめきがよいのでは……とさえ見受けられる。これではぐあいが悪い、という知らせでとんできたなどとは言えたものではない。
「お母さん、ご気分いかが」
鮎子は少しおどけてみせながら、喜和子の右手をそっと握りそれとなく脈を診る。
それにしても……。鮎子はため息をついた。この暑いのに羽毛の掛けぶとんとは……。おまけに足もとには湯タンポが入っている。
夏も終わりに近づいて朝夕めっきり涼しくなったとはいえ、これはやりすぎもいいところだ。脈はくには不整はないが、一分間に九二もあるのは、体を暖めすぎているせいに違いない。夜中のうわごとも寝苦しくて、うめいたのではないかしら。
〝お姑さんが変だ〟と寿々子に呼ばれてとんでくると、いつもこの調子なんだから、と鮎子は苦笑する。早速、羽毛ぶとんを夏掛けに替えていると、そこへ寿々子が入ってきた。
「お義姉さん、掛けぶとんはまだ夏掛けでいいと思いますけど」
「そうかしら、このごろ明け方が急に冷えるでしょう。利かないほうの足をさわると、それは冷

たくなっているの。かぜでもひくと大変だと思って」
「でも首のまわりが汗でじっとりしているわ。夜中に発汗すると、夜明けにそれが冷えて、かえってかぜをひく原因になるのよ。お義姉さん暖めすぎも……」
と言いかけたとき、
「おまえはそう言うけどな」
地元の市役所に勤める兄の公雄が出勤スタイルでそこに入ってきた。
「おまえはいつもこの家にいないから無責任に言うけどな、かぜをひいて困るのは我々なんだから……。もちろん、母さんが一番苦しむよ、それは」
無責任だなんて。プロ看護婦としての助言ではないか、と鮎子は反発したかったが、
「じゃあお母さん、行ってきます。あとで笹井先生がきてくれるそうだから」
公雄はさっさとそこを出て行く。寿々子がその後ろを追った。
なによ、困ったときは、夜、夜中、たたき起こすくせに。病状に心配ない、とわかったからこそ、そんなえらそうなことを言えるんじゃないの。鮎子は兄にそう言いたかったが、母の手前、黙っていた。
公雄と省一は大学の先輩後輩にあたり、鮎子と六歳違いの兄は四三歳、夫は四一歳になる。この二人をみて感じるのは、男は、この年ごろになると、急にえらそうな口を聞くようになる、ということだった。
大体、子のいない兄夫婦は母に対して過保護すぎる。老人をいたわるのは美徳だが、度をすご

すと逆効果で、老化を早め、悪くすると痴呆さえ招きかねない恐れだってある。そもそも母が寝ついた原因からして、そのことと無関係ではなかったのではないか。鮎子にはそう思われてならないのだ。

あれは三年前の夏のこと。

暑中休暇でもなければ、おばあちゃんのところへ行けないからと真由美と圭太をつれて実家に帰ってみると、母は寝床のなかで四つんばいにはいつくばって、ウンウンうなっていたのである。その哀れな姿に鮎子は腰をぬかさんばかりに驚いた。

「いったい、どうしたの」

「お姑さん、神経痛で体のあちこちが痛むというものですから、近所の人が整体治療がよく効くって教えてくれたんです」

寿々子の説明によると喜和子はいやだと言ったが、すぐ治るからというので、今日その治療院へ行ってきたのだという。

「背骨と頸の骨がずいぶんズレているんですって……」

寿々子が言いかけると、でもそれからが大変だった、と喜和子は涙を流した。首の骨やら背骨やらが曲がっているから元の位置に戻す、と言って、体をねじ曲げるやら反らすやら。そのたびにボキボキ、ボキボキと骨が鳴る。

「アイタタタ、イタイ、イタイ、もう、やめてください」

と言うと、

「このぐらいでやめては治りませんぞ、って。バターン、バターンと床にたたきつけられたり、それで、とうとうへたばって立てなくなり、寿々子さんにおんぶされて帰ってきたのよ」

母はまた〝ああ、ひどい目に遭った〟と涙ぐんだ。

「わたしも見ていてハラハラしたのだけど、明日になれば嘘のようによくなるそうですのよ」

鮎子は聞いていて鳥肌が立った。

骨細で華奢な体つきの母は、そのとき七〇歳、それでなくても女性が老いれば、骨粗しょう症に見舞われる。そんな手荒な治療をされて、よくぞ骨折をまぬがれたものだ。

果たせるかな、母はその翌日から腰がぬけて、寝込んでしまった。それから一カ月もしないうちに失禁がはじまったのだ。

きっと整体治療とやらで、腰椎をやられたのではないか、失禁はそのせいに違いない、と鮎子はあやしんだのだが、父が亡くなるまで世話になった近所の笹井医師の往診の結果、「脳血栓」と診断されたのである。

そのとき鮎子は、兄夫婦には母をまかせられない、とさえ思った。ちょうど訪問看護の仕事について三年め、ようやく患家になれたころではあったが、この際、仕事を辞めて母を引き取り、最後まで看るべきではないかとずいぶん悩んだものである。夫はおまえの気持ちもわかるが、兄さん夫婦の立場もあるからと、この件については終始黙否し続けた。

兄と弟と三人同胞の鮎子は、「活け花教室」を開いている寿々子ひとりに病人を押しつけるのではなく、弟の嫁陽子も呼んで、ローテーションを組み、母を介護しようと計画したのだが、弟

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com